

慰霊祭存続 4団体切迫

遺族・同窓会7団体「不安ある」

沖縄戦犠牲者の遺族や同窓会などが行っている慰霊祭について、主催する県内17の団体を対象に沖縄タイムスが実施したアンケートで、慰霊祭の存続に「不安がある」と答えたのは7団体あり、うち4団体は「存続の可否を話し合っている」ことが分かった。一方で「子や孫、地域が主体となって続けてほしい」と願うのは10団体に上り、高校生ら若者を巻き込んだ支援体制づくりや、証言集や映像制作に乗り出す動きもあった。体験者の減少や高齢化が進む中、次世代へのバトンをどうつなぐのか、模索が続いている。

本紙アンケート



一般社団法人の運営で継続している沖縄師範健児之塔の慰霊祭。6月23日、糸満市摩文仁

次世代へのバトン模索



存続の可否を議論している団体の一つ、開南中学校同窓会・遺族会は会員約250人のうち約半数が戦争体験者で、平均年齢は約80歳。「慰霊祭をどう続けていいか不安」と吐露し、塔の維持保全会の設置や、同窓生のきょうだい、子どもから希望者を募り、慰霊祭開催の主軸を担ってもらうことを検討中という。

沖縄陸軍病院慰霊会がこれまで組織的な慰霊祭を終えたほか、ふじ同窓会（積徳高等女学校）も来年から個人の自由参拝にする。南洋群島帰還者会は「帰還者

業など各高校の同窓会は組織体制が強く、平和学習の一環として高校生も参加し、慰霊祭を続けている。瑞泉同窓会は2年前、首里高等女学校の関係者や親族を中心に慰霊祭を支援する「サポートの会」を発足。旧県立一中、首里高の卒業生らでつくる養秀同窓会も、その運営を支える。

が、協力が継続していく」と期待を込める。資料館を運営するひめゆり同窓会は「後継の同窓会がない団体は慰霊祭の継続が難しいと思う。少なくとも慰霊塔は、県主体で管理してほしい」と指摘した。

沖繩師範健児之塔での慰霊祭は、同窓会主催は終了したが、09年から学徒の遺族が代表を務める一般社団法人「うーとーおきなわ」の主導で復活。「ここに来れば必ず皆に会えるという日時と場所を提供することが大事」と強調した。

アンケートは、市町村など公的機関の主催を除く、6月23日に慰霊祭を行った主な団体の代表者を対象に、直接記入してもらった。記者が聞き取りしたのは最も会員数が多かったのは旧県立二中、那覇高出身者らから成る城岳同窓会の約4万2100人。最少は宮古島市平良地域遺族会の15人で、全会員が戦争体験者で平均年齢は92歳だった。

がいなくなれば消滅するとの認識はあるが、例えば「ミクロネシア友好協会」などに変更して、若い世代に継承できないか模索中」と説明した。「不安」と回答した別の団体からは「遺児を中心に慰霊祭を実施しているが、遺児も高齢化している」「行政がやらないといけない時期が来ている」などの声が上がった。

一方で「不安ではない」としたのは9団体。学校が業など各高校の同窓会は組織体制が強く、平和学習の一環として高校生も参加し、慰霊祭を続けている。瑞泉同窓会は2年前、首里高等女学校の関係者や親族を中心に慰霊祭を支援する「サポートの会」を発足。旧県立一中、首里高の卒業生らでつくる養秀同窓会も、その運営を支える。

沖繩師範健児之塔での慰霊祭は、同窓会主催は終了したが、09年から学徒の遺族が代表を務める一般社団法人「うーとーおきなわ」の主導で復活。「ここに来れば必ず皆に会えるという日時と場所を提供することが大事」と強調した。